

はいふり世界で航空主兵

エタノールの神様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

模型飛行機大好き中学生の勝田博は初心者のお癪にスケール機を飛ばしていた会田清華を注意したら清華の飛ばしていた機体の急降下突撃の餌食になり殺される。

しかし大人しく成仏することはできず神に強制的に転生させられる

そのさきは飛行機が模型でさえ存在しない世界だった…

彼思う、ないものは作るしかない

そう、彼はキットが存在しない1/1のラジコン…ではないがかなり精密な零戦を作ったことがある。その技術を使えばグフフッデユフフフ

彼は目指す、この世界に航空主兵論をぶつける！

その前に飛行機作らなきゃじゃん…

目次

てんせい	1
配属、飛行船支援母艦加賀！	7
ついに飛行機はラジコンに	12
台風下での全力公試	18
よくよく考えたらホワイトドルフィンって白鯨じゃなくて白イルカ だった	25
空に憧れて	31
シーシェパードは結構強い。	38
無能艦長と航空主兵	43
縮小模型の試験をラジコンでやると…	50

てんせいーい

「勝田また飛行機つくってんの？ガンプラやろうぜ」

またこいつか。これだから架空プラモデラーは。

「こいつは烈風じゃないか。」

「残念。これは試製烈風。誉搭載型。機首が絞られているのが特徴。」

「今空母造ってるからのせてくんね？」

「無理。試製烈風は着艦フックついてない。そもそもプラモデルにラジコンを乗せようってのがおかしい。烈風は1/8、貴様の翔鶴は1/50。着艦は出来ても発艦出来ない。よって無理。」

「えー」

模型部：人が増えてから結構絡まれるようになったな：零戦二型使い魔仕様飛ばしてたらア二研からオタ道来たし。

「みんなやめろ。こいつがスタント出てるから模型部続いてるんだろ。現に勝田目的で女子部員も入ったじゃないか。」

「…飛ばしてくる」

「おう、すでに会田が飛燕二型飛ばしてるから混線しないようにやれよ、あいつ旧式の赤バンド使ってるからな」

いやアホかよあいつ初心者だろ。スケールから始めるにしても三式初歩練習機とか三式指揮連絡機とかから始めろって言ったろ。覚えてないのか。

「大丈夫。2.4GHz帯で飛ばすから。ガソリンある？」

「あるぞ。あとこの無線機持ってけ。今日から校庭飛行場はこれで先生に申告いれないと飛ばせなくなった。」

「わかった。」

「待つてその缶ガソリンって書いてあるけど中身グロー燃料だぞ」

「…部長、自転車の件と合わせて覚えておいてください。」

「ばれてたか」

試製烈風は機首が絞られていて空気抵抗が小さい。よってエンジン規定のあるスタント大会のスケール部門ではかなり大きく働く。さすがに液冷スケールには敵わないが…

「中等部3年丙組模型部勝田博、校庭飛行場の使用許可を求めます。」
「こちら職員室。わかりました。中等部3年丙組模型部勝田博、校庭飛行場の使用を許可します。すでに中等部一年甲組会田清華さんが飛行中です。離陸の際は十分注意してください。」

「わかりました。許可ありがとうございます。」

僕が今度出場するのは池上杯のスケール機のコース40周部門。スタントとは名ばかりの変態機動で規定のコースを40周するのだ。

しかもそのコースはめちゃくちゃで、通過態勢に規定があるポイントもある。去年は高度50cmのポイントに背面飛行指定あった位だ。つまりくるくる回ったり急上昇急降下は普通にあり、しかも一周の飛行距離が長い。そしてラリー形式。

簡単に言おう。市販のキットでは燃料が足りない。エンジン規定があるからといって純正エンジンを使っているのは後ろに追い付かれる。操縦索にバルサ材を使っていたなら下手な機動をとればすぐに折れる、割れる。

だから必然的に機体が限られてくる。日本機だと雷電や鍾馗などが多い。理由は簡単。胴体に大きな余裕があり、燃料タンクを積むための操縦索も収まる上、翼が小さくロールが速いから。

僕が烈風を選ぶ理由。それは主翼が大きくて翼内燃料タンクを積めるというロマン。それだけだった。僕にとって烈風を選んだことよってついでにきた日本機最小の空気抵抗何て言うものは副産物ではない。

「あつ先輩も飛ばすんですね。」

「初心者のお癖に低翼機なんて飛ばしてどうする。すぐ落ちるぞ」

「じゃあ先輩は初心者の時は何を飛ばしてたんですか?」

「三式初歩練習機、三式指揮連絡機、初歩練は複葉、指揮連は高翼。初心者は低速でも飛ばせて飛行が安定している機体から始めないと危ないぞ。」

「練習機に連絡機……」

そういつて彼女に忠告し、自分の烈風の離陸準備に入る。

そして電動スターターでエンジンを始動しようとしていたとき……

「せんぱーい！操作が効かなくなっちゃいました！」

その声を聞いたときにはすでに遅く、僕は部長特製のアルミ外板飛燕二型の急降下突撃の餌食になった。

死に際に自分の股間が踏まれたのだけはわかった。

忠告は大人しく聞けよ…会田…

知らない天井…なのか？これは天井なのか？プラネタリウムじゃないか？いやプラネタリウムも結局天井なのか…

「バカなこと考えてないで起き上がってください」

「……………誰？」

「神です。」

「おけ、じゃあすぐに成仏させてくれ。」

「なんでそうなるの!？」

「いや輪廻転生とか七生報国とか僕信じてないんで」

「そうは問屋がおろさない！」

「おろせ」

「無理です。」

「無理を通すのが神だろ。」

「無理なものは無理です。」

「じゃあそうだな、神様には感情的になってもらって条件反射で僕を成仏させてもらおう。」

「どうやって?」

「こうやって」

僕は神に近づくとまずお〇ぱいを揉み、唇を合わせようとするが

ちなみにちゃんと火を消して合格した。燃え移った服の火も自分で消した。

そういやここ飛行機存在しない世界だな。そのせいで新幹線の登場がもといた世界よりずいぶん遅かったようだ。(もとの世界では新幹線の振動問題を零戦のフラッター対策を応用して解決したがこの世界では翼のある飛行機が存在しないためその技術がなかった。)

しかも国土水没してるし。関東平野が関東湾だよ。

こほん、状況を整理すると、

この世界の日本は近代に無茶苦茶をやったせいで国土が沈没したよって海上都市が建設されたり海軍が強化されたりと一大発展島国となった。

この世界では坂本龍馬のねーちゃんが女子海援隊なるものを作ってそれが今のブルーマーメイドになってるんだと

また世界の海軍が解体されてホワイトドルフィン(白鯨)なる世界海軍が出来たんだと。

なんかブルーマーメイドはほぼ海の何でも屋(警察から海難救助、軍としての機能など)といっても過言でもないため汎用性に重きをおいている

ホワイトドルフィンは軍事的な面が大きいいため戦闘に重きをおいている。

僕、大鷲 隼人はそのホワイトドルフィンに入隊すべく呉東男子海洋学校の入学試験を受け合格した↑イマココ

飛行機無いなら海軍入っても意味無いよ…

あつ無いなら作ればいいじゃん

配属、飛行船支援母艦加賀！

入学式なんてめんどくさいものは俺は無意識に過ごす。

ともいかない。同じ船に乗る同期が水上じゃないバギーを持ち込んだのだ。しかも四輪

なんか飛行船支援母艦はでかすぎるから格納庫のなかを部品ของせたカート押して走るのがめんどくさくてこれを革新したかったようだ。校長教官は新しい試みだとしてこれを許可した。やったね！飛行機作るときの軽量で高出力のエンジンを確保したよ！…出力が必要最低限だけだね

…みんな疑問に思わないか？戦闘に重きを置く白鯨（ホワイトドルフィン）に主に遭難者の捜索に使用される飛行船支援母艦が配属されたいることに…

なんとこれ、噴進魚雷を飛行船から飛ばすことで敵の噴進魚雷の射程圏外からアウトレンジ攻撃を行うためのもの飛行船の母艦である。

なんだよ航空主兵論こっちにもあるじゃん、そう思うかもしれない。だが、この世界の飛行船は遅い、遅い、遅い！

だから平射砲の徹甲弾でも易々と迎撃されるのだ。そのため攻撃用に有人機は無い。

そもそも飛行船自体の揚力がヘリウムだよりで小さく、噴進魚雷積んだらレーダーは積めず、レーダー積んだら噴進魚雷が積めず、分けて積んでもコンピュータリンクシステムはレーダー搭載機や噴進魚雷搭載機には積めないため、現実的には母艦のレーダーで敵を見つけ、相手の目視範囲の外から噴進魚雷を撃つ、そんな運用だ。

白鯨アホなの？こんなもの制式採用しちゃっていいの？絶対うちの校長教官の報告書に丸め込まれてるよね、目を覚ませ白鯨本部！

まあこいつは「練習攻撃型飛行船支援母艦」らしい。さすがに国連の白鯨本部も「日本だけでやってくれ」って感じで白鯨全体でも実戦配備艦は日本本部のいせ、ひゅうが、いずも、かがの四隻だけだ。

話を戻そう。僕は晴れて飛行船支援母艦加賀に配属された。そし

て役職は整備科。良かった、搭乗員とかだったら有事の際は即死だもんな。

「お前も整備員か」

「だれ？」

「真田だよ！真田優、ほら、中学一年生の時二週間だけ転校してたんだよ！三次中に！」

「ああ。確かヘリウムを使わずに飛ぶ飛行船を作るって言った同志か」

「そう！その同志真田！覚えてるか？同志大鷲！」

「覚えてる覚えてる、船のスクリューを上向きにたくさんつけてたバカのことなんて忘れるもんか」

「ひどいぞ！同志大鷲！」

「感動の再開をしているところすまないが甲板に集合してくれ」

「はいはい」

「彼艦長だぞ」

「ひいひい！了解いたしました！」

「そんなに固くなるな」

「先程のご無礼をお許しくださいいいいいいいいい」

「いや役職は上だけど同級生だろ、同い年だろ」

「残念ながら私は浪人生だ：一浪で艦長だぞ：笑えるよな…」

「なっ！艦長は浪人生でしたか！」

「弄ってやろ」

「かんちよー！はよきてなー！」

「えっ待って副長は女なのか？」

「いや女だろ。あの容姿で男はないだろ。」

「彼残念ながら副長でもなければ女でもないぞ」

「じゃああの胸はなんなんですか…」

「隠れ胸筋と脂肪だな」

なんでそれだけでDはくだらない大きさになるのか疑問だ。

「えら？同志真田はどこ行った？」

「指宿飛行船科長のちんこ確認しに行つて返り討ちにあつてる」

「止めてくれよ艦長…」

「そいつは無理だな、だって指宿のやつめっちゃ強いもん。」

艦長の威厳はどこに行った

なんか甲板訓示はそんなに固い内容じゃなかった。

出航してからは集合地点まで法を守れば自由航海なので飛行船の発艦はない。それから格納庫は一階が満載なだけで二階はほぼなにもない。よって飛行船支援母艦練習生のみには許された特権、非番の時は格納庫で工作することができる！を発動して僕は紙でモデルを作って飛ばしている。

「同志大鷲！これでヘリウムを使わずとも空を飛べることが証明されたな！でもなんで飛ばたかない翼にしたんだ？これでは自分で飛べないではないか！」

「話を船に置き換えれば簡単だ。船は浮かぶのと進むのと同じ機械でやっているか？」

「なるほど、船が浮くのを船体に、進むのを機関とスクリーンに任せているなら飛行機でもそうすればうまくいくわけだな！そうなれば飛行機のためのスクリーンを作らなくてはな！」

「ということで同志真田、この竹をこの設計図通りに加工して塗料塗って」

「了解だ！同志大鷲！ん？断面が主翼と同じような…」

「同志真田よ、主翼は前からの風をきって上向きの力を働かせるものだろう？では自ら風を切り前に進むにはどんな形が効率がいいと思う？」

「同志大鷲！そういうことか！わかったぞ！ソッコーで仕上げてください！」

単純でありがたいな…

ということでは自分は機体の改修をする。

脚の代わりにそりつけてたけどこれをプラレールのタイヤにして、エンジンはミ○四駆のプラズ○ダ○シユモーターでいいか、てか9V角形電池はなんでパナソニ○クの電池しかないんだろうな。

「同志大鷲！できたぞ！どうだ！」

「オーさんきゅーさんきゅーものすごくおありがたいぞー同志真田。」

「もつと感謝してくれてもいいんだぞー同志大鷲！」

重心をかえないために機体の重心にパワーパック（電池とモーターと配線）詰め込んだせいでプロペラシャフトが異常に長くなったがいか。

これで機体は出来上がった。

あとは飛ばすだけだ

「よし、飛ばすか」

絶縁用の半紙を引き抜く。

プラ○マダツシ○モーターが唸りを上げる

二階格納庫のはしに試作一号機を置く。

すごい。飛び出さんばかりのパワーだ。さすがミニ四駆の最高峰モーター。馬力がちがうぜ。

「こちら同志真田！撮影よーいよし！」

「こちら同志沢田！計測よーいよし！」

「こちら同志大鷲、滑走よーいよし！」

「はじめ！」

試作一号機は○ラズマダツ○ユモーターを唸らせ加速する。

反トルクのせい少し左によっていく。

こいつが離陸するのに必要な速度は15 km/h。

その速度までの加速を終えて

試作一号機は中に舞った！

「やったぞ！実験成功だ！」

「信じられない！ヘリウムを使わずに飛ぶ機械を作り出せたなんて！」

「やっとここまで来た…」

がちやり

「飛行船整備科の大鷲はいるか！」

「艦長！避けて！」

「は？」

どんがらがっしやーん

カウンタートルクによってバランスを崩した試作一号機は突然第二格納庫にやって来た艦長の士官服に突っ込み、粉碎された。

この世界における最初の「固定翼動力機」の飛行で、はじめての固定翼動力機による事故が発生した。

ついに飛行機はラジコンに

「へー、それで僕のラジコンカーのエンジンとサーボがほしいんだ」
「その通りです。エンジンひとつとサーボ四つ、それからリモコンを
いただければそれでいいので…どうか…どうか…」

「お願いします！指宿飛行船団委員長！」

今僕は飛行機をラジコントロール操作するためのサーボとり
モコンとエンジンを獲得すべく指宿飛行船団委員長の自室で土下座
をしている。

てか委員長の部屋マジで女の子っぽいな。ぬいぐるみいっぱいあ
るし。可燃物多すぎだろ不燃加工したのかよ。

「二ーハチでいいかな？」

「ありがとうございます！」

「それからこれがサーボね、あとはこれがアンテナ、リモコン、それか
ら…」

ラジコンに必要なものの結構もらった。すげーよこれで二機作れん
じゃん

… 僕らは機体を作るべくして二階格納庫に向かう。するとそこには

「おもしれーことやっぺんなら俺らも混ぜろよ！」

機関科のヤンキーが二人いた。

「同志大鷲！今回の実験の主眼とかいろいろ説明してくれ！」

「わかった、同志真田。先日我々は動力機の飛行に成功した。だがプ
ロペラの反トルクによって機体はバランスを失い艦長の士官服に激
突した。」

「あのあと説教受けたけどなんで同志沢田はいなかったんだ？」
「いろいろごまかしてにげたのさ。」

「しかしこの反トルクは尾翼の角度を変えたり双発にして回転方向を変えたりして解決できることが昨日の実験でわかった。」

「串形双発もうまく行ったよな。」

「三回くらい後ろのプロペラこすってぶっ壊れたよな」

「そうだ、同志沢田。そこからプロペラは前につけるのがよいと結論付けたよな」

「そうだな、人が乗ってなくて良かった。」

「それから僕らは飛行機を自由に操る方法を探した。」

「それで補助翼なる動翼、昇降舵なる動翼、方向舵なる動翼を潜水艦をヒントに考え出したんだったよな。」

そしてそれを紙飛行機にてその理論を証明している。

「で、これは飛行機の操作方法を確立させ、人間が乗って操作しても問題ないことを確認して、有人飛行の許可を艦橋メンバーに取り付けるのが目的だ。」

「今までの実験を二階格納庫でやって来たせいで信じてくれるの艦長しかないもんね。」

『「ヘリウムや水素を使わずに飛ぶ方法なんてない！」って言われたよね」

「同志沢田、俺たちもちよっと前までそう思ってたじゃないか」

「そうだったな、同志清原。」

「だがここで問題発生だ！」

「なんだと！同志大鷲！」

「機体の材質の都合で双発にできない！」

「ああ、カウンタートルクか。」

「それなら尾翼傾けてエンジン傾けりゃ行けるだろ」

「そうやって解決できるって結論付けたじゃないか」

「お前らカウンタートルクなめんなよ？」（あと単純に甲板で飛ばすからエンジン不調で離陸距離伸びたら海ポチャするかもって心配もあるんだけどな）

そうして我々は最初のラジコン一号機を完成させた。

単発のエンジンからはプラスチック製の四枚羽根のプロペラが延び、騒音の心配がないため排気管は推力式だ。

長方形のなつがい主翼は胴体の上についており、水平尾翼は垂直尾翼の真ん中辺りに付いている。乱気流を避けるためだ。

前輪式の固定脚は針金で止められていて、前輪はラダーと連動して動くようになっていて、主脚にはバネのサスペンションがついていて着艦のときの衝撃を抑える仕組みだ。

「はやく甲板にもって上がろうぜ！」

「ダメだ！」

「なんで！」

「艦長からな、『母艦から発艦する飛行船なんだからエレベーターであがってこい！』って命令もらってんの」

「先にそれを言えよ同志大鷲……」

「じゃあ同志大鷲は上に上がっていてくれ！」

「何を言ってるんだ？同志清原」

「ここでリモコンの操作と機体の動きがあっているかどうか確かめて、それからエレベーターで機体は甲板に上がる、同志大鷲は階段をあがって艦橋のデッキから操作する。この方がかっこいいだろ。」

「わかった。じゃあエンジンと機体の動きを合わせるぞ」

そして電動スターター……なんてものは指宿から借りておらず、無理やり手でぶん回してエンジンを始動し、スロットルレバーを合わせる。

そして昇降舵、補助翼、方向舵、スロットルの順番で動きがあっているか確かめる。

なんか順番がおかしいと思ったそのラジコン熟練者！

俺は勝田博だったときに使っていたコントローラーのモードは左のスティックにエルロンとエレベーター（つまり操縦桿）、右のス

ティックにラダーとスロットル（ラダーペダルとスロットルレバー）のモードだ！転生して忙しかったからモード3だったかモード4だったか忘れたがな！

「じゃあブリッジに上がってくる。同志諸君、機体をちゃんと甲板にあげてくれよ！」

「合点承知だ！同志大鷲！」

「初飛行でお披露目だ！チビるなよ！同志大鷲！」

「壊したら指宿委員長の蹴りが飛んでくるぞ！同志大鷲！」

「艦橋の奴等を驚かせてやれ！同志大鷲！」

「わかった！いつてくるぞ！」

（艦橋）

「艦長、風上に向かって前進一杯をお願いします。」

「わかった。取舵30度！」

「とーりかーじ！」

「前進一杯！」

「前進一杯！よーそろ！」

「後部エレベーター上がります！」

「おお！あれか！」

「ほんとに浮き袋がないぞ！」

「どうやって飛ぶんだ？」

「頭に竹トンボがついてるぞ！」

「小型のモデルですが、ラジオコントロール試作一号機になります。」

『同志沢田、最終チェックだ。いくぞ！後ろから見て、エルロン右が上に、左が下に！』

『オツケイ！エルロン右が上、左が下になってます！』

『ではつきだ！その逆！』

『ちゃんと逆になってるぞ！』

その後もつつがなくチェックが進んだ。

「艦長、発艦許可を。」

「スタートマン！許可を出せ！」

「発艦許可を出します。」

「発進！」

指宿委員長からいただいたエンジンが唸りを上げ、推力式排気管から排気を吹く。

機体が加速する。エンジンが唸る。

少しずつつ左に機体が寄っていくが、ラダーを蹴りそれを修正する。滑走を始めてから40メートル。機体はついに浮き上がった。

「嘘だろ！」

「浮き袋ついてないのに！」

「空気より重いものが浮いた！」

「操舵変わるから航海長も見ろ！」

「機関科のためにビデオ回しといてやろう！」

「すごいぞ！歴史が変わるぞ！」

俺は左のステイックを右に倒す。すると機体は右に曲がり始める。少し手前に引いてやるとその半径が小さくなる。

「うおお！曲がったぞ！」

「旋回した！」

「こつち来るぞ！」

「『うおおおおおおお！』」

「すごいな！大鷲君たちは！」

「あれに乗れたらどんなに楽しいだろう！」

「このあといろいろ実験して人が乗れるようにするんだらう？」

「はい。ですが陸上から陸の上を飛ぶぶんにはここまでの技術だけでも大丈夫です。」

「なんと…」

「では着陸させますね」

機体は甲板に後ろからアプローチする。

エンジンの唸りを抑え、高度を下げていく。

降下しつつ減速し、機体は甲板に近づいてくる。

そして…

前輪式の機体のランディングギアは甲板に接地し、機体が滑走する。

そして甲板の真ん中辺りで止まった

この世界で初めてラジコン飛行機がとんだ瞬間だった。

台風下での全力公試

「さすがに人が乗るとなると大きいな。」

「僕らは二階格納庫にある有人試作一号機の骨組みを眺めていた。」

「このサイズになると着艦制動距離足りないだろ」

「そのために着艦制動フックと着艦制動ワイヤーの実験しただろ。」

「そのための二枚羽」

「複製って言っただろ？こういうの！」

「機体はよ完成させようぜ」

「それなんだけどな、同志大鷲」

「なんだね同志真田」

「材料がない。」

「は？」

「要件を満たすエンジンもなければ外板となるブルーシートもないぞ。」

「それからもうすぐで訓練海域につくから機体固定しないと壊れる。」

「そっか、じゃあ固定しないと。」

「でも材料ないのは辛いよな…」

「エンジンルームに収まって150馬力以上出るエンジンどこかにな
いかな…」

「まっ先に演習だ。気持ち切り替えよーぜ！」

「僕らは飛んでも落ちてもホワイトドルフィン練習生。もともと呉
東海洋学校に入ったのはホワイトドルフィン(白鯨)に入隊するため。
今日は集合地点到着日の二日前。目的地付近の演習海域にて、艦に
異常がないか確かめるために艦長の独断で低気圧に突っ込み全力公
試まがいのことをするのだ。」

そして1200、全力公試もどきが始まった。

※『』のなかは伝声管からの声です。

『総員！戦闘配置！』

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリ

「第一小隊了解！」

「第三小隊了解！」

「第四小隊了解！」

「第六小隊了解！」

ざっぱーん

波が押し寄せる

艦が大きく揺れる

「うっ！」

指宿飛行船団委員長が壁に叩きつけられる。

「指宿委員長！」

「この変態野郎！ボクより備品だ！さっさと確認してこい！」

「アイアイサー！」

(ほんとに委員長女っばいな…うわ！)

がっしやーん

コンテナが崩れる。

『第一小隊全員負傷！軽傷一！重傷二！』

『軽傷一名に応急処置を施せ！』

『右舷30度より波来ます！高さ4.5メートル！』

『機関一杯！面舵30度！』

『おもーかーじ！』

「次は右舷倉庫！モタモタすんな！第二小隊第一小隊重傷者の代わりに行け！」

「了解！」

「大驚か！第一小隊軽傷者は！」

「そうだ！飛行機の大驚だ！」

「そのこのロープをとってくれ！この箱の固定が緩い！」

「なんで飛行船設備用の倉庫にみかんの箱があるんだよ！」

「第一第二小隊！無駄口を叩くな！」

「すみません委員長！」

「くっそ！あのアマ！」

「あれでも男だ！」

「みかんの箱の固定完了！」

ぎっぴーん

「あつ！りんごの箱が倒れた！」

「ここは食料庫じゃねえのになんでこんなもんが！」

「知らん！いってえ！」

「どうした！」

「ネズミ取りに引つ掛かった！」

「だからここは食料庫じゃねえっての！なんでネズミ取りがあんだよ
！」

「ずばろーし！ペチャクチャしゃべらんとはよしねーやこのあんごう
が！」

「岡山弁でてんぞ！ばかたれ委員長！」

「大驚お前！委員長にそんな口聞いたら！」

「大驚…これ終わったら覚えとけよ…」

「委員長に死ねって言われた」

「ありや倉敷弁だ！岩田！そのベルト回して！」

「ほい！」

「サンキュー」

「第五小隊！無人15番機の固定を再確認だ！固定具は今持つていく
！」

『左舷40度から波！高さ3.5メートル！』

『取舵40度！左舷停止！』

『とーりかーじ！』

『清原！左舷止めろ！』

『了解！』

艦が左へ回頭する

『左舷一杯』

『左舷一杯よーそろ！』

艦が大きく動く

「うおお！」

「島田！大丈夫…じゃねえ！」

格納庫の中で飛ばされた第五小队島田は固定用具を持って走っていた指宿に激突、奇しくもその胸筋に顔面が挟まれる結果となった。

「なんと言うラッキースケベ！」

「男どうしだろ！何に萌えてんだ！」

どごん！

拳の音が響く

「てめえどこに顔埋めてやがる！」

「すみませんこれは偶然です！」

揺れ巻くる艦内で殴り問答が繰り広げられる。けど…

「無人15番機が滑るぞ！」

「第六小队援護頼む！」

「委員長避けて！」

「ロープよし！」

「車止めよし！」

「よっしゃ！止まった！」

ふう。よかった。

そう思ったのもつかの間。

「大驚！危ない！」

僕の頭に崩れてきた木箱が激突した。

知ってるけど慣れたくない天井だ…

絶対的医務室だろここ。

「起きたか！同志大鷲！」

「起きたよ、同志…誰だっけ？」

「忘れんなよ！真田だ！中学の時スクリューを上につけまくってたアホだ！」

「ああ、あの真田ね」

「どの真田を思い浮かべた!？」

「赤い真田」

「タイムスリップすんな！」

おもしろーやつだな…

「あつそうだ、同志大鷲、お前明後日から内地で精密検査な。」

「なんで？」

「演習中ずっと寝てたから」

「は？」

いやどう言うことだ？これから演習が始まるんじゃないのか？

「動作確認でくたばって演習中ベッドで寝てるとか…」

「は？僕丸三日寝てたの？」

「お陰で艦長以下艦橋メンバーは上陸禁止だつてさ」

「マジかよ」

「それから残念なお知らせがもうふたつ。」

「なんだよ」

「校長からラジコンのレプリカもしくはコピーを作って学校に提出すること、という命令が出た」

は？…なんで？…なんでばれたの？

「それから、有人試作一号機が演習前演習で大きく損壊した」

「マジ？」

「マジ。」

航空主兵への夢が一步遠退いた

よくよく考えたらホワイトドルフィンって白鯨じゃなくて白イルカだった

『これより我々は横須賀女子海洋学校の間宮、明石から補給を受ける！総員戦闘配置！』

ジリリリリリリリリリリリリリリリ

『非常閉鎖よし！』

『主砲配置よし！』

『速射砲配置よし！』

『格納庫配置よし！』

『機関配置よし！』

『見張り異常なし！何も見えませんが…』

『無人機コントロールルーム配置よし！』

『電探異常なし！バッテリー間宮、明石、その周りを囲むように駆逐艦三を確認！』

『識別信号は？』

『明石、間宮、朝風、浜風、舞風と確認！』

『よし、無人機を出せ！無人13番機、無人12番機発艦用意！識別信号通りか確認しろ！』

『無人12、13番機発艦用意！』

『ヘリウムおよび燃料確認よし！』

『操作無線繋げ！』

『繋ぎました！』

『後部エレベーターに12番機を、中央に13番機を動かせ！』

『了解！』

『同志沢田！13番機を押すのを手伝ってくれ！』

『了解だ同志大鷲！』

艦長はさすがだ。味方であってもそれは乗っ取られて攻撃に来ているのかもしれない。それを考えての総員戦闘配置と偵察機発艦だろう。

一浪してるだけはあるな。

「13番機中央エレベーターに乗りました！我々整備士と共に甲板に上がります！」

「中央エレベーター上昇開始！」

「後部エレベーターも準備よし！」

「後部エレベーター上昇開始！」

「整備士！無人機のカメラの前に立て！映像確認を行うぞ！」

「了解、カメラの前にたちます！」

「こちら無人機コントロールルーム、カメラ映像よし、ちゃんと写ります。」

「やれやれ。毎回発艦の度に顔をカメラに写されるのって辛いんだよな…」

「中央エレベーター上昇完了！」

「後部エレベーター上昇完了！」

「これより無人機が発艦する。整備士は退避せよ！」

「待避！待避！」

全く…忙しいぜー！

『無人機発艦準備よし！』

『無人機発艦せよ！』

今度は着艦だな…誘導灯を持ってこなきゃ…

『無人機コントロールルームから艦橋へ、目標探知。』

『発光信号によって通信し、安全を確認せよ。』

『了解、無人機から発光信号送ります』

「艦長、加賀の無人機より発光信号です。」

「読み上げて」

「貴艦らは停船し補給準備に入られたし、我そちらに向かい航行中」

「返信、了解。貴艦は我々の後ろに回り込んで補給位置に着かれたし」

「了解、返信します」

「やるわね、呉の一年生たち」

「台風の中突っ切ったらしいしね…」

「艦長は彩と一緒に一浪らしいよw」

「あんた覚えてなさい」

飛行船支援母艦加賀はぐると方向を変え、補給艦隊に後ろからアプローチする。

「第一第四小隊、第二第五小隊に仕事を引き継いだ後待機！」

「やーっと終わったー」。

内地（ただし境港。軍艦用の補給施設なし）に寄港して僕は精密検査を受けた。結果は良好。取り越し苦労だったようだ。

しかし加賀は補給していない上に当初のルートから大きく遠回りしたため燃料消費が予定より多く、また早く飛行機が見たい艦長が色々コネをつけて横須賀女子海洋学校の工作艦を補給につけることができた。

「やったね。色々と技術支援をいただけるよ！」

「なあ同志真田」

「なんだ同志大鷲」

「僕が精密検査をしてる間に飛行機はなおったか？」

「骨組みはなおったぞ！境の海上都市でブルーシートも買ったから結構出来上がったからな！あとはエンジンだけで！」

「そこまで終わったか…」

「第三、第六小隊は補給準備を手伝え！」

「第一、第四小隊は待機続行か。」

「なんか整備課って雑用みたいだよな…」

「臨検隊も整備課から編成されるし、陸戦成績トップも整備課だし、料理に至っては主計科より上手にできる自信はあるし」

「自信だけじゃなくて実力も実際にあつたし…」

「一応機関も弄れるし…」

「艦長の愚痴も聞いてくれるし…」

「もうまじで整備課ってパシられすぎだろ…」

「だよなー」

誰も気づかない。しれっと加賀副長が話に紛れ込んでいることに。

「エンジンあるかな…」

「明石に積んであったとしてももらえないよな…」

「もらえるわけじゃないじゃん。150馬力以上のパワーが出るガソリンエンジンで軽いやつなんて。」

「やろうか?」

「は?」

「え?」

そこにいたのは明石の艦長、横須賀女子海洋学校3年明石組の東山彩であった。

「ひっ! 東山艦長!」

「私の船に水平対向六気筒の200馬力のガソリンエンジンだったものがあるけど?」

「できればそれを…いただけないでしょうか…」

「だからあげるって言ってんじゃん」

「いただけるのですか! やったあ!」

「まって、さつき水平対向六気筒の200馬力のガソリンエンジン

「これを貴様らにくれてやろう！お代は飛行機械の完成だ！」

「感謝感激雨あられ、下げた頭が地面にめり込み地球の反対側に出そうです…」

「ではこのエンジンを二個、加賀に運ぶように手配しよう。」

「ありがとうございますいま…えっ？二個？」

「予備が要るでしょう？」

「東山艦長太っ腹…ダメだこのご恩を御返しする方法が見当たらない…」

こうして僕らはエンジンを獲得、あとはエンジンルームの再設計をするのと同志沢田のトレーニングが終わるのを待つ、これだけだ。

追記、同志真田が明石艦長の自室に連れ込まれたあとから奴はおな
らが出まくってるんだ。どう言うことだろうか？

空に憧れて

今僕は明石艦長の東山彩先輩からいただいたエンジンを改造している。

まず排気管。とにかく長いから切る。けど排気管の形はエンジン出力に直結してたりするらしいから結構慎重にいく。

推力式単排気管にすればいいと思ったそのド間抜け。お兄さん蹴らないから大人しく手をあげなさい。

だってブルーシートの外板だよ？燃えたら困るんだ。だから排気管はカバーでおおって外に突き出さないといけないんだ。

次にラジエーター。もう取っ払ってしまおうかなと思ってます。だって飛行機だよ？空冷で問題ないし逆に液冷の方がエンジンお熱だよ。

それからシリンダー付近に乗っかってる装備はエンジンの後ろに移動させる。空冷にするからこの辺りは風通しがよくないといけない。よってこれらの装備は邪魔だ。

けどその装備のなかに排気タービンの関連装備があるので排気管ごと改造を検討している。

てかなんで直噴なのにターボついてんだろ？空気過給してそのぶんたくさん燃料噴射しようってか？もうわからん！これ以上はいじれないから機関科の同志清原たちに丸投げしよう！

「てことで同志清原、瀬久原、頼んだぞ！」

「弄りかけの魔改造エンジン…こいつは…楽しみだ！」

「瀬久原もよろしくな！」

「直噴は気化器がないぶんいいな。扱いやすい。」

「お前キャブレター苦手なのか…」

よしっ！機首形状の再設計するか！

（艦橋）

「艦長、学校から入電です。」

「読み上げろ」

「はっ！」

発、呉東男子海洋学校、宛、練習攻撃型飛行船支援母艦加賀。

10分前にシーシエパードより、硫黄島付近で操業する捕鯨船団に対する攻撃予告があった。一番距離の近い貴艦は横須賀女子海洋学校の補給船団から航洋直接教育艦浜風の指揮権を受領し、護衛に向かえ。尚現在ホワイトドルフィン日本支部より第四高速警戒戦隊がそちらに急行中、それまで捕鯨船団を護衛せよ。

とのことですよ。」

「硫黄島か…」

「俺たち小笠原村近海ですよ？なんで硫黄島に一番近いんですか？もつと近い部隊が居るでしょうに」

「第四高速警戒戦隊つてはやぶさ型護衛艇で構成される高速部隊じゃん〜！」

「白海豚の位置は？」

「残念ながらまだ浦賀水道を出ておりません…」

「マジかよ戦闘不可避じゃん」

「艦長、指示を。」

「よし、補給を7分目で切り上げろ。30分後に抜錨、発進する。」

「了解しました。」

「それからもうひとつ。」

「丁度航路が風上に向かっていく形だ。同志大鷲たちのカモメ計画の実験を硫黄島道中で行う。伝えてこい。」

「了解だ、同志一浪艦長」

「むっ！大鷲！艦長に失礼だぞ〜！」

「確かに年上で目上で艦長だが奴は一浪だ。」

「貴様！」

「戦地」

へ赴くのだ。

「取舵120度、硫黄島近海へ進路をとる。」

「とーりかーじ」

「第三戦速、浜風に合わせる」

「第三せんそーく」

「艦長、まもなく1130です。」

「よし、カモメ一号を用意せよ。試験を行う。」

「こちら大鷲、車止めよし」

「こちら沢田、エンジン始動準備よし。」

「こちらー指宿ー、エレベーターあげるぞー」

「こちら沢田、エンジン始動します。」

ぶるるん

ぶるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるん！

すげえな、壮観だ。

「エルロン確認、操縦桿を右に倒す。はい倒した」

「おっけー、右エルロン上がり、左エルロン下がってるぞー」

「左に倒す。はい倒した」

カモメ一号はエンジンを唸らせ甲板を走り始める。

「よし、いいこだ、いいこだ。ちよいちよい左に寄ってるけど、ラダーで戻るからいいこだ！」

機体は加速する。

機体が艦橋の横を通り抜ける

「時速84 km/h、今だ！」

同志沢田は操縦桿を引いたようだ。機体が浮き上がる！

よーし、上昇角はいい感じだぞ、離陸して高度をとるまでが危険なのはラジコンも同じだ

「とんだ！浮き袋のついてない飛行機械が！とんだ！」

「世紀の大発明だ！」

「歴史が変わるぞ！」

いやいや歴史は変わらないから。あれだよ、親殺しのパラドックスみたいに。

「どうした同志大鷲。あんなものは見慣れたような顔じゃないか」

「っ！そんなことはないです！いやー自分でも驚いてますよ」

「嘘だな。」

ぎくう！

「これまでちゃんと飛ぶように研究してきたのであろう？ならばこれまでで得た情報からこの飛行機械が飛ぶのはわかりきったことじゃないか。」

「そうですね…」

「けど同志大鷲、君は慌てて『そんなことはないです』と答えた。なぜだ？」

「謙遜です。」

「謙遜ならそんなに慌てないはずだ。」

「むう」

「ここに一冊のノートがある。」

「!？」

「これにはドイツのオットー・リリエントール、アメリカのライト兄弟

などの名前が書いてある。私が知る限りではオットー・リリエンター
ルは小型蒸気機関の開発で名を挙げており、ライト兄弟は自転車の発
展に尽くした人物だ。二宮忠八は飛行機械の研究をした人物として
有名だが失敗しているし、オクターヴ・シャヌートは鉄道分歧器、
シャヌート式クロッシングの開発者として一部で有名だ。堀越二郎
は確かに三菱の技師として有名だが零戦なんて飛行機械はこの世に
存在しない。」

「……………」

「問おう。同志大鷲、君は異世界の人間か。それとも、前世が異世界の
人間なのか。」

「同志艦長、僕は…」

そういいかけたとき、カモメ一号が甲板に滑り込んできた。

シーシエパードは結構強い。

※『内部は伝声管から聞こえてくる声です

「こちら無人機コントロールルーム、捕鯨船団は硫黄島東36kmを安定して航行、操業中。無人機6番機のカメラ越しに確認。また無人機9番機からの通信が硫黄島南南東40kmで途絶えました。撃墜されたようです。」

「だとするとその辺りにシーシエパードか、その他武装集団がいるわけか…反捕鯨団体ならそれらしくしてくれよお」

「シーシエパードはかなり大きい組織ですから…。反捕鯨団体としてもテロ組織としても。」

「どらくらいって聞かれたらまあ学生艦隊の水雷戦隊くらいは殲滅できらって答えられるくらいには大きい組織だしな、囷作戦を使えるくらいには武器もあるらしいし…もしかしてこれ囷?」

「囷作戦を使ってまで捕鯨船を攻撃して油垂らしてそれは鯨のためになるんだらうか」

「なりませんよ、艦長。」

艦橋メンバーは気楽だな…こっちはどんどん無人機飛ばしてどんどん無人機下ろしてで忙しいのに!

『ふんぎいいいいいいいいいい』

「さつき水測室に繋がる伝声管から悲鳴が聞こえたんだが…」

『こちら水測室。航行予定表にない潜水艦のエンジン音を300度方向より探知。ですがうるさすぎて距離がわかりません。』

「音紋はとったか?」

『とりましたよ。未知の音でしかも爆音でしたので。でもスクリーンの音は伊201型に似てましたね。あっ!』

『どうした?』

『だんだん音が大きくなっています。ドップラー効果が働いているのか音がだんだん高くなっていますね。これで距離を測定しますのでしばらくお待ちください。』

「おう、いそげよ」

『ムキイイイイイイイイイイイイ』

「今度は電探室からか、どうした。」

『奴め：電探から消えやがった…』

「どいつだ？」

『おそらく9番機落とした奴。』

「じゃあその辺に無人機集中させるか。それから浜風に300度方向へ転舵し、対潜戦闘を行うように通達、ただしアクティブソナーをモールス信号代わりにして脅せ。攻撃はそれからだ。」

「なんと打たせましよう？」

「速ヤカニ機関ヲ停止、浮上シ、全員甲板ニ出テワレワレニ投降セヨ。サモナクバ撃沈スル。ワレ海上安全整備局代理横須賀女子海洋学校航洋艦浜風。とな。」

「了解しました。」

「それから攻撃の条件は警告文二回目で聞かなかった場合、魚雷発射管の開口音、注水音、装填音、などの魚雷の発射準備と思わしき音を聴致した場合、浮上してもなかなか甲板に出てこない場合、その他警告に従わない場合。もちろん先に攻撃されたら容赦なく沈めていい。できるだけオーバーキルで頼むけど今後の戦闘に支障のないようにすること。そう伝えて」

「細かいですねえ。」

「いいから送れ」

「はい。」

うちの艦長容赦ねえな…

「艦長から無人機コントロールルームおよび格納庫へ、無人20番機から無人36番機までの17機の一斉発艦を用意、1230には発艦させる。また全機に磁気対潜索敵装備を装着。そのあと無人11番機から無人19番機の9機と、無人37番機から無人42番機の6機に二式爆雷を装備させ出撃待機させる。後者15機はシーシエパードの武装船が発見され次第出撃だ。」

うちの艦長はなんでこう人使いが荒いんだか。

状況を整理しよう。

我々は硫黄島東で操業中の捕鯨船団をシーシェパードから護衛すべく硫黄島北を捕鯨船団に合流すべく南下中である。しかし硫黄島南南東にて索敵をしていた無人機が撃墜され、また我々に向けて突進中の潜水艦を右300度(つまり左60度)から探知、浜風が警告(ただし生きて返す気ゼロ)に向かった。

そして僕たちは現在17機の無人機を一斉発艦させるべく格納庫にて奮闘中である。タイムリミットはあと10分!磁気探信儀の装着作業もあるよ!これ六小隊24人で間に合うか?間に合わないよね!これだから艦長は!

こんな突貫作業だからいつもは指示飛ばしてる指宿委員長もそんなことやっつてられず…

く格納庫く

「こちら第三小隊!指宿委員長!15番機の磁気探信儀持ってきてください!」

「はいよー」

重たい磁気探信儀の乗った台車を押して無人15番機のある格納庫前部まで110メートルを全力疾走!

「こちら第六小隊!17番機バッテリー交換お願いします!」

「はいはい」

台車から磁気探信儀を下ろしたかと思ったら今度はバッテリーのある艦後部倉庫へ200メートルちよいを台車を押して全力疾走!

そしてバッテリーを積み込んで走り出すはずが…

「こちら第一小隊、無人12番機第三モーター焼ききれています！」

「ちよつと待つてろ！」

はい、ジャツキとかその他もろもろと第三発動機ギミックまるごと追加積載が入りました！

しかし！指宿委員長の「トラック用タイヤ8個引きずって100メートル走」15秒の成績は伊達ではない！台車に乗っていて摩擦が少ない分今の方が速い！

「こちら第二小隊、11、13、14、16番機前部エレベーターにのせます！」

「おう！」

ほどなくして前部エレベーターが動き出す！1230まであと5分！

「こちら第四小隊、15、17番機を中央エレベーターまで移動させます！」

「いそげよ！」

格納庫通路を無人15、17番機が押されていく！

「12番機第三発動機ギミック取り外し完了！」

「おし！新しいの取り付けるぞ！」

1230まであと4分！間に合うか！

「電装接続完了！」

「動作確認はじめ！」

あと2分！

「よしナット全部締めろ！」

あと1分30秒！

「全部締めまりました！」

「今動かせるのは後部エレベーターだ！いそげ！」

あと50秒！

エレベーターに乗った！

「こちら整備科、無人機コントロールルーム聞こえますか？無人12番機のコントロール接続お願いします。現在後部エレベーターで甲

板へ上昇中。」

『こちら無人機コントロールルーム、了解、接続します。』

あと25秒！

『すみません。時間がないのでエレベーターから発艦します！端に待避してください！』

「マジかよ！同志艦長なにやってんだよ！」

「いいから下がれ同志大鷲！」

きゅいいいいいいいいん

無人機12番機が飛び上がっていく。

「同志真田、僕は今ソビエトを作った人たちの気持ちができる気がするんだ。」

「奇遇だな同志大鷲。俺もそんなことを思ってたところだ。」

「ペチャクチャしゃべんな！今度は残りの無人機に爆雷引っ付けるぞ！」

「ウツセエ乳揉むぞこの男装委員長！」

「同志真田！それは機雷にぶちあたって」

僕が警告するちよつと前。同志真田の股間へと向かう指宿委員長の右脚の残像が見えた。

無能艦長と航空主兵

『こちら無人機コントロールルーム、磁気探信儀反応あり！シーシェパードと思われる潜水艦発見！』

『無人機からの映像確認！目標、浮上する模様！』

『無人機を高高度に避難させろ。攻撃飛行船団発進！』

よし！見つかったか！これで地獄の作業が終わる…

『浜風から報告、目標潜水艦は警告に従わず航行を継続したため撃沈した。これより捕鯨船団護衛に向かう。とのこと。』

『我々も捕鯨船団に合流する。進路はこのまま、最大戦速！見張りを入念に！』

終わるわけないじゃん…まだまだシーシェパード暴れるかもだし

…

く艦長side)

『こちら無人機コントロールルーム！』

『どうした！』

そんなに大声を出して。何事だ。

『索敵に出した無人機、全て撃墜されました…』

『なんだと!?!』

『なんだと!?!』って言われても予想できたでしょうに。射程と射角さえ足りていれば飛行船は平射砲の徹甲弾にさえ易々と撃墜されるんですよ?』

『それもそっか』

『やっぱり無能艦長ですね。女の子にいいところ見せたかったんですか？無人機結構撃墜されていますしこのままだと学校にめっちゃ怒られますよ?一浪艦長。』

だが我々は練習生ではあれど命令を受けているホワイトドルフィン部隊。ホワイトドルフィン本隊が到着するまであと10時間、なんとしても捕鯨船団を護衛しなくてはならない…沈めてもいらしいが浜風が捕鯨船団を離れると捕鯨船団が危ない…かといつて対潜攻撃能力を持たない我々がいくわけにも行かない。

うーん詰みか？

『こちら無線室、捕鯨船団から通信、漁を終えたので帰港する、今回はかなりおおぶりの鯨が捕れた。』

「返答しろ、了解、護衛を続行する。とな。あと…ええつと…そうだな、大漁旗を掲揚しろ。」

『はいはい』』

艦長 side おわり

攻撃飛行船団を下ろすつて…飛ばしたばかりだろ。なにかんがえてんだ無能艦長

そうか、飛行船飛ばしたつて無駄だとやっとわかったのか。

「同志大鷲、今度寄港したら艦長殴ろうぜ。」

「やだ、飛行機いじる。」

「そーいや飛行機のエンジンどうするんだ？」

「誰か家が重工業やってる奴いないかな…」

「いないだろ、そんなの」

「アルミ製の機体も試したいしな。アルミを手作業で加工するのはきつい。それから当然重量もかさむからエンジンももつと強力なものが要るだ。」

「そうなると着艦制動索ももつと強力なものが要るな」

「そうだな…つて指宿委員長！」

「ほら、さっさと固定しろ。」

「へーい」

そうやって僕は無人機の着艦準備のため、着艦拘束装置を用意していたら…

こちらに突進してくるボートを見つけた。

「左舷ボート確認！高速で接近してくる！速力50ノット！」

『なんだと!?!』

この報告で艦橋がかなり慌ただしくなる

『こちら見張り、接近中のボートは魚雷艇と確認！』

「あれだろ、同志沢田は自動車より速い乗り物にのってスピードジャンキーになったんだろ」

「言ってやるな同志清原、飛行機を実用化するにあたってスピードは大事だ。」

「同志瀬久原の言う通りだ、だがスピードだけでは飛行機は軍民共に売り込めない。」

「それからいつまでも木枠にブルーシート張りでは強度の問題が残る。実際問題カモメ一号は帰港を途中で行った飛行実験で着艦に失敗してぶっ壊れてたろ」

「僕はもう金属製に入りたいんだけどな…エンジンとアルミの手配もできてなければどこの工場も借りられない…」

「うち家が呉の町工場だけど最近三菱が『ジュラルミンで超軽量で超低燃費の超軽量四輪軽自動車作るから試作車作れ』って言ってきて親父がめっちゃ張り切ってたな…」

「マジか同志清原…」

「…同志大驚のがつつきがマジパねえ。」

「いや、自動車丸々作れる町工場なんてそうそう無いし、ジュラルミンで飛行機作る技術があるかもだぞ！同志真田！」

「落ち着け同志大驚、ほら同志清原、なんかいってやれ…」

「頼む清原、お前のおやつさんを説得して飛行機作らせろ」

「しーーーーーっ！同志清原はおやつさんと電話中だよ！」

「同志瀬久原…先に言ってくれ…」

「んじゃ親父、今から行くわ」

「はっ!？」

「つくつてくれるってよ」

「マジかよ清原のおやつさん神じゃん！」

「工期は!？」

「設計図見ねえとわかんねえって」

「マジかいかなきゃ！清原と清原のおやつさんに感謝だぜ！」

「キヨハラモーターズ」

「こんにちわー」

清原の親父の工場すげえな…車の部品が所狭しと並んでるし倉庫もいっぱいある…

よく見たら最近の車に見えて20年くらい前の車もある…

これ日産のセレナの初期モデルじゃんよくこんなの残ってたな…

「よく来たな！まあ入れ！立ち話ではなんだ！ちよつと辛いだろう！」

そう言つて清原のおやつさんは工場の中に案内してくれた。なんか工場なのか疑いたくなる設備を目の当たりにしながら隅っこにあるカウンターみたいな席に案内された。

………言つていいのかは知らないがおそらく修理に出されているであろう車たちはどこかレース使用だ。一応修理が完了したであろうアクテイーは前席のドアの少し前のところ、ボンネットと乗員区画の境界であろうと頃から推力式単排気管が飛び出ている、物好きな所有者さんなのだろう。

ぶら下げているのは最近You Tubeで人気の「サーキットでプリウスミサイルやつてみた」さんのプリウスじゃないか？こんな奇遇なこともあるもんだな…

「親父、大鷲に油が移る！」

「ああスマンスマン、ああー、これはちよつと時間がかかるな…」

「何カ月かかりそうですか…」

「そうだなアー」ヶ月半…いや二ヶ月つてところだなア…」

「そうですか…」

「やっぱりか…」

「それからそうだなア：いくらかかるかなア、呉東の生徒さんを借金まみれにするわけにもいかんしなア」

「それに関しては心配なく、自分の小遣いから三億くらい持ってきました。」

「こりやあつり銭が高くつきそうだなア」

それから僕と清原のおやつさんは二時間ほど話し込み、契約書を書いてキヨハラモーターズを後にした。

「礼儀正しい子達でしたね、工場長。」

「それはいいとして、この設計図を見てみる。」

「ほんとにこんなのが空を飛ぶんですかね：主翼？つて書いてありますけど、これってなんかスポーツカーのウイングを逆さまにしてアツプフオースを狙った感じがしますけど…」

「いや、そうじゃない。彼らは二回しか飛行実験を行っていない。」

「それがなにか？」

「我々が今度三菱のコンペに出すハミィーは何回走行実験を繰り返した？」

「かれこれ600回ほどですね：あつ！」

「気づいたか。普通二回の実験でこれ程精巧な設計図に至るか？しかもその二回の実験は有り合わせの機材で行ったそうだ。なにかもとになった飛行機があるに違いない。」

「確かに…」

「だが私は先ほど頭のなかで世界史の復習をしたが二宮忠八でさえ飛行機の製作には至っていない。」

「ですがこの設計図を書いたのが彼が呉東に入学する前だったら？」

「ならばなおさら、だ。実験も行っていないのになぜこのような『空気

より明らかに重い機械』が飛ぶと確信できる?。」

「それは…」

「それと君も知っているだろう、最高の物を作れと言われて個人に設計図を書かせるとその個人の性格がよく出る。しかし彼の性格とこの飛行機械の設計はどうだ…」

「…機体は繊細だけど遠めで見ても彼はこんな性格ではない…」

「そうだ。まるで他人が設計したのを少しばかり改良したようだ。」

「彼は何者なんだろうな、楽しみだ。」

縮小模型の試験をラジコンでやると…

出港が予定より大幅に、大幅に遅れることになりました。
大規模改装のお知らせです。

なんと学校で校長含め行われた無人機の大量喪失に関する幹部反省会で艦長の意見具申が通ったらしく来年行うはずだった大規模改装を今行っているらしい。

しかし、教育課程を遅れさせることはできないため、突貫工事で終わらせるそう。その工期はなんと3ヶ月。

大規模改装の工期としてはかなり短い。もはや教育艦として運用するのに安全性が心配になるくらいの突貫工事である。

しかし、教育の空白期間としては結構長い期間であるため、穴埋めのため上陸期間中は座学や地上訓練が行われる。しかし艦艇実習と比べれば自由時間は多い。

言ってしまう。カモメ計画を進めるチャンスだ。

よって僕たちカモメ計画の同志たちは金属製の飛行機ができるまでの間、学校の使用していない埠頭でラジコンや有人機を飛ばして研究を進めている。しかしエンジンがくせ者で自動車用ラジコンのエンジンしかない。

「冷却を考えればこんなエンジンの方がよくないか？同志大鷲。」

「あー星形エンジンか、確かにその方が冷却はよくなるがトップヘビーにならないか？同志瀬久原」

「そもそも僕たちはエンジンを作ることはできない。残念だったな、同志瀬久原。」

「今回はみんなそれぞれテーマが違うよな。」

「そうだな、同志清原と瀬久原が機関の冷却、真田と沢田がスピード、大鷲が積載量と安全性」

「同志大鷲色々一人でやりすぎだろ。」

「これくらいがいいんだ。」

今まで彼らが発見（僕にとっては再確認）したことについて確認する。

「やべー！滑走距離足りなかったか！」

「フラップ、フラップ！」

「あつー忘れてた！フラップダウン！」

機体が浮き上がる。滑走距離は実に300メートルを越える。どこまで翼削ったんだよ…結構主翼ちっちゃいけど

…やつら今までラジコン飛ばしたことあったっけ？いや確かにある、でも何回だったか？

「うわマジかよこの機体！操縦桿スティックの縦方向の反応が鈍い！鈍すぎる！」

「やっぱりか！」

※ラジコンのコントローラーですが、転生してきた大鷲隼人は転生前は日本どころかアメリカでも見かけない

左スティック↓エルロンとエレベーター、つまり操縦桿

右スティック↓ラダーとスロットル

という世にも奇妙な物を使用していました。

「スピードを上げたら反応がよくなるんじゃないか？同志沢田。」

「おっそうだな、同志瀬久原、スピードあげてみるぜ！」

「そもそもトビウオ一号はスピードを出す前提で設計してるからな」

「電波届くんか？」

「届くギリギリまでの範囲で極力スピードを落とさないように飛行させる。」

く飛行機あるあるく

飛行機の舵は速度が速いほど小さい操作でも舵の効きがよくなる。しかし、同時に舵が重くなる。

逆に速度が遅いと大きな操作をしないと舵が効きにくい。だが、舵は軽くなる。

よって低速と高速では同じ操作量当たりの舵の効きが違うのだ。

よってパイロットはそれを考慮して操作しなければいけないのだが、それを軽減すべく、飛行機にはいろいろな工夫がされてきた。

例えば零戦の剛性低下式操縦索。

操縦索をワイヤーを編んだようなものにして、速度が上がると舵の負荷が大きくなるのを利用してそのワイヤーが延び、操縦桿を大きく操作しても大きな舵の動きにならないようにするもの。

しかし欠点もあり、高速では操縦桿が重くなり、どんな力持ちでもびくともしなかったのだとか…

僕の前世のラジコンにはそれを自動修正…っていうよりは離着陸時と飛行時とで舵の動きのセッティングを変えてくれる？サーボのシステムがあつたはずなのだが…

自動車か船のラジコンが主流のこの世界ではそんなものあるわけもない。しかもトビウオ一号の問題はそこにはない。

尾翼も削つちやつてるのだ。これは致命的すぎる。

ラジコンでスケール機を作るときは、だいたい実機より尾翼が大きくなるものだ。理由は簡単。

実機と同じ比率だと舵が利きにくくなるから。

よってスケール機では水平尾翼の面積が主翼の1/3くらいまで巨大化していることが多い。

例外もある。現にトビウオ一号がそうなってしまっているし、前世で会田がメッサーシュミットBf109Eのラジコンを作ったときもそうだった。…ダメだあいつと女神はまだ許せない。

「降下してスピード上げてみようぜ！」

「そうだな、同志清原！降下始め！」

機首を下げて降下を始める。しかし…

「なんか速度あがんねえな。」

「プロペラがブレーキになってるみたいな…」

「エンジンパワー下げて降下角あげてみるか」

「ちよつと待てそれをする…」

どっぼーん

大事な実験機体は海の中へと消えてしまった